平成 14 年 6 月 27 日

慢性腰痛を主訴として来院した無月経症

小池英義

持続性の慢性腰痛を訴えて来院したが、本態が婦人科領域であると判断、無月経を含め婦人科的治療を先行した結果、腰痛も改善したので報告する。

症　例：26 歳、女性、会社経営
初　診：平成 13 年 10 月 10 日
主　訴：慢性的な腰の痛み

現病歴：大学を卒業した頃から徐々に腰痛が始まり、愁訴の増減はあるものの、3 年前生理が止まった頃より、持続性の腰部全体の鈍痛を覚えるようになった。月に 1～2 回マッサージ治療を行っている。治療した時は楽になるが、翌日には元に戻る。腰痛対策としては何も行っていない。今回は２ヶ月位前より腰痛が強くなり来院した。現在、姿勢の変化などによる痛みの増強はない。仰臥位臥床により比較的和らぐ。起床時が愁訴強く、一日中腰部の鈍痛を感じている（図 1)。腰痛が増悪した原因は、仕事が忙しくなったこと以外は思い当たらない。

生理については、毎月あったものが３年前会社を起業した頃より不順になり、４ヵ月位で止まってしまった。無月経になって３ヵ月後大学病院を受診し、半年くらい甲状腺機能亢進症の投薬治療を受けたが、月経再開しないため中止した。以後、３ヶ月に１回黄体ホルモンにより月経を生じさせている。生理止まってから今日まで自然経過による月経はない。前回のホルモン療法による月経は 9 月 12 日に始まり 7 日間続いた。生理痛が激しく、いつも 3 日間は鎮痛薬を服用する。出血量も多い。医師には、子宮糜爛と子宮軽度後傾後屈を指摘されている。出生時体重 2600g、初経は 14 歳、初交は 19 歳の時、未婚で現在不規則に月 1～2 回程度の性交渉あり、妊娠経験はない、性病・性感染症の既往はない、帯下は白色のことが多く量も多い、その他手足の冷え感あり、便秘ぎみ(2 回/W)。

生活状況は、半分は国内外の出張で不規則となり、あとの半分は比較的規則正しい。アルコールは仕事上月 2～3 回付き合い程度、タバコは吸わない。

既往歴：甲状腺機能亢進症
家族歴：特記すべき事なし

診察所見：身長 154cm、体重 39kg。腰部前弯軽度増強、腰仙角や仙腸関節部の角度鋭角。両手掌・足底は湿潤で、手部・足部全体に冷感が認められる。小腹部正中周囲は、やや湿潤で冷感あり、表面は萎えているが、ある程度押圧して行くと腹壁の抵抗が認められる。腰背部起立筋は左右とも軽度緊張。

圧痛は、左少腹部、腎兪、志室、大腸兪、次髎に検出（図 2－1・4)、左少腹部、腎兪、志室は著明に認められた。

診　断：月経停止した機転や臨床症状・所見から機能性の続発性無月経症と診断し、持続性の腰痛は、その随伴症状として対応することにした。

対　応：生理が止まった時と腰痛出現した頃と、時期が前後していることから、この腰痛は婦人科的問題と関係しており、順調であった月経周期が、会社起業によって、過大なストレスとなり、心因性の無月経になったものと思われます。まず、婦人科的問題に主眼をおいて治療を始めたいと思います。その中で腰痛が改善されて行くものと思われます。また、私の方でも無月経の内容をもう少し詳しく把握したいので、基礎体温表を最低 40 日間つけて下さい。

治療・経過：治療は患者の体格や状態（虚証タイプ・瘀血の証）から、温灸をベースとして、まず婦人科系の循環促進と機能回復を目的に行った。

治療体位は仰臥位で、小腹の気海から関元にかけて、半テニスボール大の温灸（隔物）（図 2－4)、両側三陰交、太衝に千年灸（弱）を各 3 荘（図 2－2)、ステンレス鍼 1 寸 3 分―2 番（40 ㎜―18 号）を用いて百会に 1 ㎜刺入（図 2－3)、治療終了まで置鍼。

次に伏臥位で、同規格鍼で命門と左右の腎兪・志室・大腸兪・次髎に各々 1～2 ㎜刺入、15 分間置鍼し、腎兪・志室・大腸兪・次髎には、電子温灸器を併用した（図 2－1)。

治療後は「体全体が温かくなった感じがする」と言われた。

生活指導：出張が多く、来院治療も制限されるので、指定するつぼ（三陰交・太衝）に毎日お灸をして下さい。食時も不規則になりがちのようですが、出来るだけ出張中も規則正しく、量も少な目のようなので多く摂る様に努力して、最低 40kg は維持するようにしてください。

第3回（10月31日　21日目）便秘がやや改善し、1日置きに出るようになった。腰痛もいくらか改善されたような気がする。治療後は体全体が温かくなった気がする。

第5回（11月25日　36日目）手掌の湿潤が消失した。しばらく出張がないとのことなので、出来るだけ間を詰めて通院するよう指示。

第8回（12月6日　46日目）手掌・足底の湿潤・冷感は消失し、日中はほとんど腰痛を感じなくなった。10月18日から11月28日までの基礎体温表を持参、黄色機能不全周期による無月経を確認し、今までの治療を継続することを伝えた。

第11回（12月17日　57日目）志室を除き圧痛や腹壁の緊張がほぼ消失し、帯下量が減少した。

前回の生理より3ヶ月無月経が続いているので、ホルモン療法を行いたい旨の申し出があったが、身体的条件が、かなり改善していることを説明し、あと1ヶ月待っていただくようお願いした。

第15回（1月4日　75日目）年末年始ゆっくり休めたせいか、腰痛は感じなくなった。志室の圧痛も消失した。

第18回（1月15日　86日目）昨日から生理が始まった。今日は出血量も多く、下腹部痛も腰痛も激しいため、鎮痛薬を飲んでいる。小腹の温灸を今回は中止した。

第19回（1月22日　93日目）生理は19日にほぼ終わった。

第23回（2月18日　120日目）2月11日に生理始まり昨日終わった。出血量が2・3日目は多かったが、生理痛は前回ほど強くなく、鎮痛剤は服用しないで済んだ。

第27回（3月20日　150日目）10日に生理始まり16日に終わった。出血量は前回より減少し、生理痛も鎮痛薬を服用する程ではない。腰痛は座業が長時間に及ぶと感じるが、それ以外は感じない。便通は毎日あったり、1日置きになったりする。

以後、月に3回程度通院しているが、生理は毎月定期的にあり、帯下も少なくなり、腰痛の再燃もない。体重は最近41kg前後を維持している。

なお、現在まで子宮糜爛については、内診を行っていないので、治癒したかどうかは確認されていない。

考　察：本症例の持続性腰痛の主たる原因は、ストレスによる心因性の無月経によるものと推定した。また、無月経は続発性の黄帯機能不全によるものと診断した。以下にその理由を述べる。

1. おおむね順調であった月経が、会社起業と言う環境変化によって停止し、前後して持続性の腰痛を発症している。
2. 基礎体温表により、高温相持続期間が継続しておらず、低温相と高温相との差が0.3℃以上ある部分が少ない。[1) 2)]（表1）

さて、婦人科の主要症候である腰痛発症因子として、解剖学的因子、器質的因子、内分泌因子などがあるが、本症例は女性の一般的因子の他、

1. 腰部前弯増強が認められる
2. 腰仙角・仙腸関節角が強い
3. 子宮位置異常として後傾後屈がある[3)]
4. 子宮糜爛の存在[4)]
5. 性周期によるホルモン周期の関連腰痛として黄帯機能不全の存在[3)]
6. 過度のストレスによる心因性腰痛[4)]
7. 便秘[4)]

などの因子が、複合的に関与し、その上、持続性腰痛の愁訴が視床下部にフィードバックされて悪循環に陥ったものと推測する。

また、黄帯機能不全と持続性慢性腰痛との因果関係であるが、基礎体温表より排卵は認められるものの、子宮内膜の未成熟が繰り返され月経に至らないことや、子宮位置異常、心因性の血流循環障害など、複合因子によるものと推測した。矢野によると、骨盤内の鬱滞により、慢性の腰部鈍痛を自覚することがあると述べている。[5)]

生理痛については、人工的月経と自然経過による月経では、本症例で有意差が認められた。月経困難症の機序としてはプロスタグランジン説が有力であるとされており、子宮筋の異常収縮、子宮血液量の虚血、知覚神経終末の過敏などにより疼痛を生じるとされているが、[6) 7)] 本治療で改善された機序は解明できなかった。

甲状腺機能については、続発性無月経との因果関係が認められており、減退だけでなく、亢進症でも無月経になることが証明されているが、[8)] 本症例については、一応解決された問題として既往症とした。また、本人が痩せ型で、体重減少と無月経との関係も考えられるが、体型変化がないことから除外した。

少ない情報の中での治験例だが、若い女性から情報を収集する難しさや、内分泌検査など医師との連携の必要性を感じた症例であった。

本症例については、腰痛と無月経が結果的に改善されたので、一応妥当であったと考えている。

参考文献

1）倉智博久：基礎体温、「婦人科検査マニュアル」、P82～84、医学書院、2002.

2）桑原慶紀：基礎体温、「不妊外来」、P20～23、メジカルビュー社、2000.

3）小川重男：性器の位置異常、「産科婦人科学」、P136～137、朝倉書店、1984.

4）野田起一郎：主訴と症状による診断、「産科婦人科学」P47～51、朝倉書店、1984.

5）矢野　忠　他：婦人科の主要症候に対する鍼灸治療、「婦人科疾患」、P114～117、日鍼会テキスト、2001.

6）松本清一：月経困難症、「思春期婦人科外来」、P88～96、文光堂、2000.

7）矢野　忠　他：月経困難症、「婦人科疾患」、P82～84、日鍼会テキスト、2001.

8）桑原慶紀：甲状腺ホルモン、「不妊外来」、P100～104、メジカルビュー社、2000.

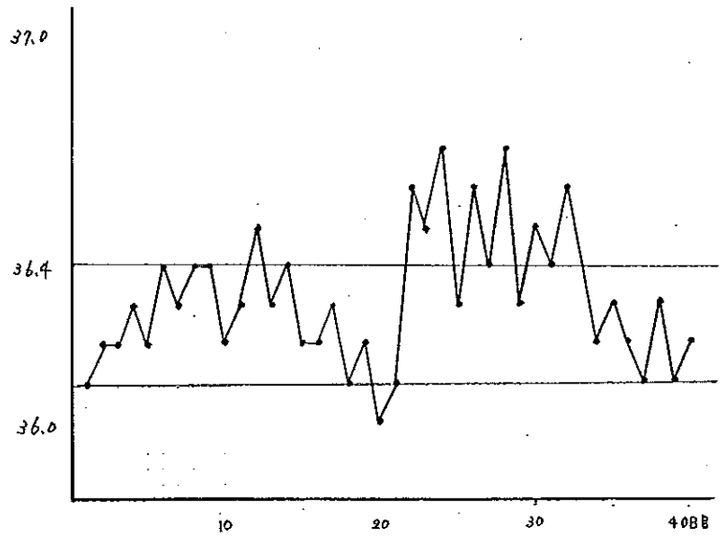

表1　基　礎　体　温　表

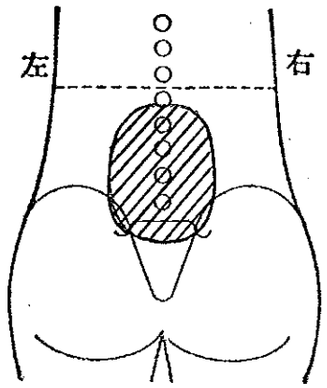

図1　腰痛の部位

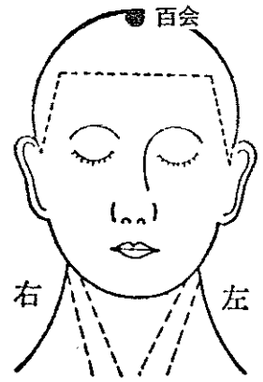

図2－3　治　療　点

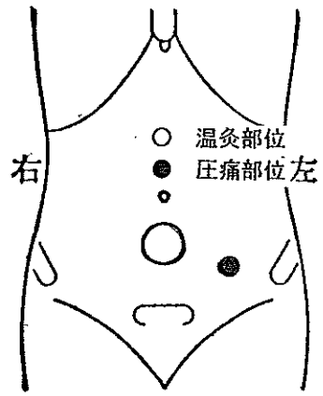

図2－4　治　療　点

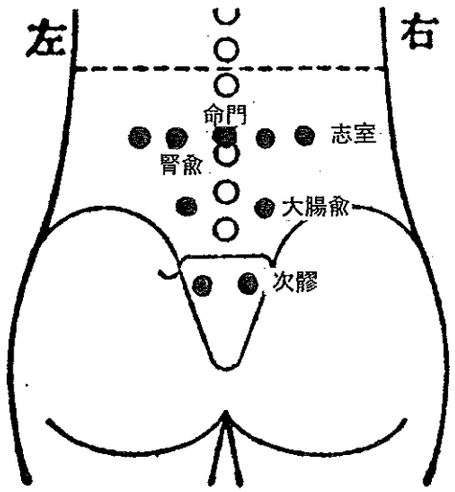

図2－1　治　療　点

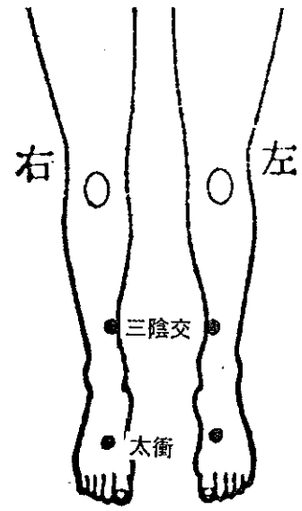

図2－2　治　療　点